異世界でもする事があまり変わらなかった人のお話。

かずさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界でもする事があまり変わらなかった人のお話。

【Ｎコード】
Ｎ８４９３Ｕ

【作者名】
かずさ

【あらすじ】
光に包まれた思ったら知らない場所にいて、そして「資質なし」と断定された男が翌日送られた所は狩られる為の場だった。
そこから男の異世界での物語が始まった。

第1話（前書き）

厨二作品。

第1話

「ガルン様……資質無しです。」

「クソッたれめ！！！！」

ガルンと呼ばれた煌びやかな衣装を纏い、太った男が壁を蹴る。

ガルンと呼ばれた太った中年は、ここの部屋の中でトップなのだろう。

皆が怒りを向けられるのを恐れているかのように怯えている。

「もういい！こいつは牢屋にでも入れておけ！」

「はっ！！」

杖をもった若い男が近くの槍を持った兵士に声をかけると、二人の兵士が涼（りょう）に近づき手枷をつけ、連行しようとした。

周りにいる兵や、本等で見る中世ヨーロッパ風の部屋並を見て言葉が通じるか危惧したが、どうやら言葉は理解できるようだった。

光に包まれたと思ったら知らない場所にいて状況整理の間に連行され、そして何かの資質がないと判断され牢屋に連行される。

とりあえずまだ何も解らないが、１時間前にいた場所とはまったく別の場所にいて、そして今大声をだしたり抵抗したりするのは得策ではないと判断した涼は、兵士に従い連行されることにした。

◆

ガシャン！

鉄格子が閉じられ４畳半程度の場所に閉じ込められる。
牢屋の片隅にはぼさぼさの髪に汚い泥色の布きれを着た男が一人死んだように眠っている。
兵士二人が帰っていくのを確認した涼は、とりあえずその男を起こす事にした。

「おい、起きろ。」

男を擦る。
息をしているのでやはり生きていると認識するが、それでも男は起きない。

「起きろ！」

涼は思いっきり転がす。
転がった男は反対側の壁まで勢いよく転がりぶつかった。

「何するんだ貴様！ぶっ殺すぞボケ。」

「すまん。手が滑った。」

「どんな手の滑りしたらこんな事になるんだよ！ボケ。死ね。」

（口悪いな…。）

「早く死ね。今すぐ死ね！…ん？……お前…。」

目の前のぼさぼさ頭が涼を、涼の服装を見て驚く。
涼は白のワイシャツに黒のスーツを着込んでいた。

「へぇ…お前…異世界人か？」

「異世界人？」

「ああ、そのままの通りさ。異世界から飛ばされてきたんだろ？」

男の言葉に少し大掛かりな仕掛けもよぎったが、気絶したわけでもないのに突然場所が変わったことや、自分にこのような事をする人もいるわけないと、その線を消し男に続きを促す。

「しかし…ここにいるって事は失敗作か……。」

「……失敗作とは？」

「異世界人は基本的に魔力資質が高いらしいんだが、稀に魔力をまったく持たない奴が呼ばれて来るんだよ。そいつが失敗作。まぁ失

敗作って言ってもこの国で魔力をもっている奴なんて、全人口の１％にも満たないがな。
だが召喚の儀は膨大な魔力を使うっていうからな、魔力を注ぎ込んで来たのが失敗作とあっちゃあ、碌な死に方はできないだろうな。
ご愁傷さま。」

奴隷が涼に向かって合掌する。

「……魔力とは？」

「そりゃ魔法を使うための力さ。異世界人は優秀な魔法使いが多いと聞いたが、最初何も知らないと言うのも本当なんだな。」

「魔法というと火の弾とか風の刃を飛ばしたりする奴か？」

「それだけじゃないが、まぁそんなもんさ。」

にわかに信じられないことだが、目の前の男が嘘を吐いているように見えない。
涼は職業柄相手の表情から嘘を見分けるのは得意だった。

「……お前は何でここにいる？」

「貴族の家に泥棒に入ったら捕まってな。」

（貴族…。）

話を聞くとこの国は貴族と平民が存在するらしい。別に奴隷もいる

そうだが。
平民から貴族になる事も可能で、数少ない確率で魔力資質のある子供の生まれた家は、その子の運と実力によっては貴族の仲間入りする事も可能だとか。

ガルンというのもこの国の貴族で、話から推察するにどうやら自分の地位を上げるつもりか何かの目的で涼を呼び寄せたらしい。
そしてこの国には市民権のようなものがあり、ガルンという貴族から与えられていない涼は今は完全に奴隷の身分だそうだ。

「とまぁこんな感じか。」

「そうか。…説明ありがとう。」

「いいってことよ。こんなとこにいると退屈で仕方ねぇ。」

話を聞いた涼は足に隠し持っていたナイフと糸を確認して寝っころがる。
傍の男に危険性はないと感じ、さらには今は寝ておくことが重要に感じた。

◆

ガルンｓｉｄｅ

「クソッ！」

ガルンは飲んでいた酒のグラスを投げつける。
近くに控えている護衛でもある魔法使いのディゼルが一瞬震える。
昔は裕福だったガルンの家は今では見事な没落貴族だった。
父が優秀な魔法使いで一世代で財を成したのだが、生まれた自分には魔力資質なんてものはまったくなく、そして金を増やす才も努力もしなかった。

遺産を食い潰す形で数十年過ごしてきたが、ようやく己の置かれた状況を理解して、仕える魔法使い達の魔力を日々専用の魔法具に溜め、そして３年近く経った今日、遂に魔力も溜まり、国に召喚の手続きをし異世界から召喚したのだが、出てきたのは失敗作。

この３年間の努力が不意になったのとこれからの事を考えると酒を飲まずにはやっていられなかった。
今でもまだ２０代前半と思われるあの黒髪の無駄に整った無表情の顔を思い出すと腹がたつ。

「ガルン様…あの男の処遇如何いたしましょうか？」

護衛であり魔法使い、ディゼルがガルンにおずおずと問いかけてくる。

ディゼルはガルンが大金を使い、平民から買い取った魔法使いだ。
平民は魔力資質のある子供が生まれると、貴族を夢見る者もいればこのように売ってくる者もいる。
ディゼルは魔力量が平均レベルであった為、両親も過度な期待をすることなくディゼルが４歳の時に売りに出していた。

「明日のクレイヌに出させる。……すぐに手続きをしておけ。まだ間に合うはずだ。」

「クレイヌ…ですか。」

ディゼルが少し緊張を孕んだ声をだす。

クレイヌ。

それは半年前に初めて実施された新兵の訓練の場。
奴隷を数十人、魔法で作った通り越えることのできない障壁を作りその境界線の内に入れて、３６０度障壁に囲まれた広大な土地で新兵である一般兵に、訓練の一環として殲滅させるというもの。

「そしてお前も志願して出ろ。ディゼル。」

「私もですか？」

「ああ。もうこの家に十分な金は無い。魔力資質の高い奴が出れば売って金になっただろうが、あいつではほんの少しの金にしかならん。異世界人を売りにしてクレイヌに出したほうが金になる……しかしそれでも足らんのだ。だからお前も参加して活躍し、顔を売っておけ。」

ディゼルにもガルンの言いたい事が解ったのだろう。神妙な表情になりつつも頷く。

ガルンはディゼルを他の貴族に譲ろうと考えていた。

優秀な魔法使いは金を持つ貴族達や国が欲しがるので、過去５回実施されたクレイヌでも毎回数名は魔法使い達が自分の存在を売り出すために参加してきた。

奴隷が新兵や魔法使い達をクレイヌで皆殺しにすると、自由を約束されるという形を取るため、クレイヌでは奴隷達も死ぬ気で抵抗してくる。故に死ぬ心配が確実にないというわけではない。

しかし過去５回のクレイヌで奴隷は約２００人殺されたが、それに対し命を落とした新兵はたったの１５名。そして魔法使いにいたっては１人も死んた事はなかった。

一見大変危険を伴う訓練に見られがちだが、クレイヌは新兵の訓練

の一環で、そのような訓練ごときで兵を無駄死にさせないようなシステムになっているのだ。

「これは命令だ。ディゼル。クレイヌに参加して一番多く奴隷を、そしてあいつを狩って来い。」

「はっ！」

ディゼルが了解したのを確認したガルンは新しいグラスを酒を入れて一口で飲み干した。

第2話

「クレイヌとは何か教えてもらっていいか？」

現在目隠しされた状態で兵士に連行されている。
昨日は牢屋で一日過ごしたのだが、今日起こされたらいきなりこの二人の兵士に目隠しされた。
その際に言われた言葉が、

『お前がクレイヌに出る事が決定した。』

だ。

牢屋のぼさぼさ男は哀れみの表情と言葉を残していたが、説明を聞く前に牢屋から出されて今の状況だ。

「黙っておとなしく歩け。」

兵士が淡々とした口調で涼に言う。
まともに答える気が無いと判断した涼はしつこく聞くと無駄に痛い思いをしそうな気がしたので、これ以上の質問をやめた。

カツカツ…

涼の革靴の音が響く。

二人の兵士も無駄におしゃべりをすることなく、両側から手枷のはめた涼の肘を掴み連行する。

そして3分くらい歩いてようやく兵士が歩くのをやめた。

「そこを動くなよ。ガルン様。連れてきました。」

「下がれ。」

傍にいた兵士達が後ろに下がる。

（ガルン…昨日の中年男か…。）

目が見えない状況で昨日見た顔を思い出す。

「貴様にはクレイヌに出てもらう。」

「クレイヌとは何か聞いても？」

「貴様！口の聞き方に気をつけろ！」

ガルンの隣から大きな声で怒鳴り散らす男に顔を向ける。

見えないが。

「よい、ディゼル。どうせ明日までの命だ。おい、貴様の名前はなんと言う。」

「……トム。」

「トムよ。クレイヌとは奴隷と魔法使いや兵士による殺し合いの場だ。新兵達に殺しや戦場の緊張を学ばせる訓練のようなものだ。」

「やはり……俺は奴隷か。」

「なに、貴様らにもチャンスはある。敵を皆殺しにしたら市民権を得る事ができて平民に格上げだぞ。」

「……」

涼は魔法使いの話は昨日散々聞いている。
その稀にしか生まれない稀少性を考えると、過去に催されたこのクレイヌでは魔法使いは滅多な事では死ななかったのだろう。
魔法使いも大量に死んでしまうような催しでは誰も出たがらない、もしくは出したがらないはずだ。

「何か質問は？」

「魔法使いと新兵は何名出てきて、そして狩られる奴隷の人数は？」

「今回奴隷は４０人で魔法使いが５人、一般兵が３０人だ。自由を獲るには悪くない条件だろう？奴隷の方が人数だって多いぞ。」

「よく言う。」

「貴様！」

隣の魔法使いが再度噛み付いてくる。

「よい、ディゼル。五体満足が参加条件だ。もう送れ。失敗作の面などあまり見ていたくない。」

「ハッ！」

ガルンに命令されたディゼルが涼に近寄り手枷をはずして少し離れ、意味のわからない呪文のようなモノを呟きだした。

そしてしばらくするとこの世界に飛ばされた時と同じ感覚が涼を襲った。

そして突然二人の気配が消えたのを確認して、涼は自分がこちらの世界に飛ばされて来た時同様、どこかに飛ばされたのを認識した。

◆

（ここは…。）

飛ばされた場所を確認する。
付近に人の気配が感じないので目隠しを外す。

目隠しを外すと、そこは森の入り口だった。
森から十数メートル離れた場所には廃れたような細長い集落の入り口がある。

そして集落の周りと隣接する今いる森にかけて、虹色の膜のようなもので囲まれており見渡すと３６０度隙間無くその膜に囲まれているようだった。
はじめて見る光景に少し驚く。

涼はとりあえず集落に向けて歩き出し、中に入る。
しばらく廃れた家などを見ながら歩いていると、数名人がいるのが確認できた。

近づいていくと、向こうの連中もこちらに気付いたのだろう。
涼がスーツ姿なのも相まってか露骨に警戒心をみせる。
彼らの容姿はまさに牢で見た男のように奴隷姿だった。

「お、おい！明日からじゃないのかよ！」

「何が明日からなのかは知らんが、俺もお前達と一緒で身分は奴隷のようだ。ああ、すまん。……お前達も奴隷だよな？」

４名の男達に確認する。
男達は顔を見合わせた後頷いた。
「お前…その服は何なんだ？見たことがない。」
「俺をここに送り込んだは失敗作と呼んでいた。……牢屋に一緒にいた奴は異世界人とも呼んでいた。」
「失敗作か…。それはまた悲惨だな。」
途端に奴隷達が警戒を解き哀れみの表情を見せ始める。
「…そういえばさっき明日からとか言ってたな。それは兵達と殺し合いをするのが明日からという意味でいいか？」
「ああ。今日は明日に向けて自由にしてていいんだ。明日少数の魔法使いと新兵達が俺達を殺しに来る…。」
代表して喋ってくる男の声が震える。
そして周りの奴隷達も泣きそうな表情になった。
「…勝ったら自由になれると聞いたが、今まで奴隷が勝ったことはないのか？」
「ない…。それどころか今までの５回で死んだ兵はたったの数名で魔法使いにいたっては１人も死んだ事がないって聞いた。死んだ奴隷の総数は２００超え…。……俺達も例外に漏れることなく全滅するだろう…。クソッ！」
話を聞いた涼は、奴隷が泣きそうになっているのを無視して、集落

を歩き見渡す。
岩を積み上げただけの家が数十軒ほどありそうだったが、まともな家は一つもなく全て半壊、もしくは全壊しているようだった。
集落の端、最南には教会のようなものもあり、教会の上の鐘のところには十字架が飾られている。
他の家と比べると教会は破損が少なく、中にいる限り外からは完全に隠れる事ができそうだった。

１時間ほどかけて一通り集落を見渡し、この廃れた集落が縦に長いとわかった。
世界地図で見たチリのように細長く、そして直線のような形ではなくうねっている。
北から南にかけて中央が通路となり、そして左右に計５０軒近い現在ではほとんど半壊状態の家々が建っていて、北の森に隣接する形の集落入り口から最南にあるこの教会までは大体直線距離で２００メートルほどありそうだった。

集落を見終わった涼は最南の教会側から集落を出て、１０メートル程先にある集落、そして森を囲んでいる虹色透明の膜に近づく。
その膜は空高くまで続いていた。
触ってみたくなったが危険も感じたので涼はまず落ちていた石を拾い、膜に向かって投げてみる。
石が膜にぶつかる……すると石は霧散するように消滅した。

（……これが1日は自由にする理由か……。この膜による囲いの外には行けないようになっているのか……しかし……魔法。半分嘘と思っていたが。）

すこし地面を掘って下からも抜ける事もできないと判断した涼は、先ほどの奴隷達のいた場所に戻ることにした。

◆

ガルンｓｉｄｅ

魔法陣の上に乗っていた異世界人がディゼルの魔法で飛ばされて消えたのを確認する。

「ディゼル。あいつはお前が殺せ。異世界人がクレイヌに出た事は今までない。奴は今回の目玉となる。」

「ハッ！確実に私が仕留めます。」

「もう今日は護衛を終了して、明日のために体を休ませておけ。」

ガルンはディゼルを部屋から出す。
ディゼルがいなくなるのを確認したガルンは一息ついて、朝からワインをグラスに入れて飲む。

（ディゼルの活躍次第か……グラハの奴も出して、活躍したほうを売りに出すという形にしたほうが良かったのかもしれん。）

既に受付は終了して、ガルンに仕えるもう一人の魔法使い、グラハを出す事はもうできない。

グラハはディゼルよりも魔力が高く、優秀な魔法使いだった。
４０という少々歳をとっているのが少し傷で、売る際に問題となりそうだったから若いディゼルだけに任せたが、今は少しそれを後悔していた。

「クソッ！使えぬ異世界人め！」

ガルンのやり場のない怒りが部屋に響いた。

第3話

涼は奴隷達がいた所に戻りながら、空高くまで続いている虹色の膜を見る。
膜は離れの北の広大な森の途中まで覆っているようであり、集落とあわせて覆っている範囲を簡単に表せばT字と言ったところだった。

涼が膜のようなものを確認して先ほどの奴隷達がいた場所、集落の中央辺りに戻ると、そこには先程より十数名奴隷が増えていた。
汚い形の奴隷達が十数名固まっていると見ると、近寄りたくない気分にもなり無意識に足が止まりそうにもなる。
それでも足に力を入れて近寄るとはじめて涼を見る奴隷達は、最初の4人の奴隷と同じ反応を示した。
しかし、4人の奴隷達が軽く説明してくれて、すぐに警戒を解いてくれた。

「よぅ。お前が異世界人か？」

はじめて見る茶髪の奴隷が涼に声をかける。
声をかけてきた男は、目鼻も整いそして奴隷達の中では清潔そうにも見えたが、それでも例に違わずボサボサの髪に布切れ1枚の格好だった。
違っている所といえば比較的健康そうな肌色なのと、他の奴隷達と比べて髭があまり長くない事くらいだろう。

「ああ。」

「俺はデュナス、デュナス・エイカーだ。今回ここにいる皆で話し合った結果、明日の戦いに向けてのリーダーになる事になった。……お前も俺がリーダーでかまわないか？」

「……ああ。」

「良かった。俺たちが生き抜くためには皆が協力しあって作戦をたてなければならない。過去のクレイヌでは例外なく奴隷が全滅しているが、多分それは何の作戦を立てることなく、我武者羅に敵に向かって突撃したからだろう。向こうには少数とは言え魔法使いだっている。そんな行為は自殺行為ほかならない。」

「そうだな。」

「そしてここには武器らしい武器なんて何もなく、家に使われた石や木材を武器に使って相手と戦うしかないが、明日の新兵は全員槍兵らしい。弓兵が皆無だから、魔法使い達に気をつければ必ずしも負ける戦いではないと思うんだ。」

「……魔法使いはどのような魔法を使うのか聞いていいか？」

「火球がメインだろう。通常半径５０センチ……魔力が高い存在にいったっては半径１メートルほどの大きな火の玉を呪文詠唱で飛ばしてくる。威力は高く、当たったら一瞬で火だるまになって死ぬ。その他にも様々な攻撃魔法に、障壁の魔法を使ったり、治療魔法を使ったりもする。」

「空は？魔法使いは空を飛べるのか？」

「いや……空を飛べる魔法使いなんて今まで聞いたことないが。」

デュナスの言葉に奴隷達も頷く。
どうやら地球での一般的なイメージ通りというわけでもないらしい。

「それで？デュナスはどういう作戦を考えている？」

「ああ…ちょっとした情報があって、魔法使いと槍兵はあの森の向こうからやって来る事を知っている。」

集落の北にある森を指差す。
涼が飛ばされた場所だ。

デュナスがそれらをわかった上で作戦を話す。

まずデュナスは、
敵が奴隷達の姿が一向に見えないと集落に隠れていると判断し、その際森から集落にある程度近づいて来て、魔法使いが火球を放って集落入り口付近の家に隠れている奴隷を殺す、もしくは中から炙り出し、それを新兵が殺すというのが相手の作戦になると予想していた。

そしてどうやらデュナスはその相手の作戦の裏を取ろうと考えているようだった。

集落の家々の中には大量の木材や藁などの燃えやすいものがあり、デュナスはそれらを集落全体の家々から持ち出して入り口側の家の中に置き、そして魔法使い達の魔法で入り口付近の家が燃えて、煙と炎で視界が悪くなったところを利用して、こちらから襲撃するつもりらしい。

涼は奴隷たちを見る。
デュナスの案は奴隷達も認めているらしく、さっきの4人も先ほどまでの絶望的な表情はなく、まるで生き残る希望をみつけたかのような表情を浮かべていた。

翌日の朝からすぐに敵はやって来るらしく、今からすぐに木材や燃えやすそうなものを運ぶことになった。
奴隷達と一緒に涼も文句や質問を一切することなく作業を手伝う。

しかし涼は運んでいる最中違和感を感じた。

「デュナス。この集落は元々なんだったんだ？」

一緒に木材を持って歩くデュナスに声をかける。

「この村はアルトっていう村だったんだ。アルトの村はイル…この国の名前なんだが1年前に国に反発して、その時に皆殺しにされたそうだ。それ以降は、このクレイヌとして兵の訓練の場として使われている。」

「1年前……ね。」

涼は運んでいる木材を見る。

そしてそれからはデュナスと話すことも無く、黙々と作業を手伝った。

夕方になる頃には燃えやすいものをほとんど移動させ、その頃には奴隷達もさらに増えて、計41名になっていた。

（ガルンから聞いていたときより1人多い……か。）

◆

夜、涼はデュナスに呼ばれて集落の最南の教会に来ていた。
他の奴隷達４０名も集まっている。
明日は敵が現れた時、まずはこの教会付近の半壊の家に隠れる事になっている。

奴隷達は使えそうな手ごろな大きさの石や木材を武器に選んで持ってきていた。
明日に備えて使い方に慣れておこうとしているのだろう。

涼は他の奴隷達とは違い、それらの準備をまったくしていないようにみえるデュナスを見る。
デュナスは一々の奴隷達の下に歩み寄り、激励の言葉をこちらまで聞こえるくらい大きな声で送っていた。

暫くして奴隷達に声をかけ終えたデュナスが教会の中央に移動する。
そして奴隷達を注目させた。

「みんな！俺たちはやれる！今までのクレイヌの奴隷達とは違う！
必ず奴らを倒し自由を手に入れよう！」

デュナスの言葉に奴隷達が雄たけびをあげる。

それは生き延びてみせるという叫び。
その叫びは北の集落入り口まで聞こえるのではないかというほどのものだった。

しかしその奮起の姿勢は涼にはただ恐怖を隠しているようにしか見えなかった。
ただ一人……デュナスを除いては。

◆

「明日に備えて今日は早く寝ておこう。」

デュナスの提案で奴隷達が教会で雑魚寝する。
涼はトイレを理由に外に出てからは、集落を歩いて見回っていた。

そしてしばらく見渡したあと集落を出て北の森に入る。
森は木々が生い茂っており、月の光もあんまり入らなかった。
ある程度森を深くまで歩いていると、森の入り口から数十メートルほど北に歩いたところで境界線が見えてきた。

境界線とはデュナスが使っていた言葉だ。例の虹色の膜の事で、奴隷達は全員知っていたが、涼はあまり詳細を知らなかったので説明

を聞いておいたのだが、あれは魔法で作ったもので奴隷は何者も境界線の向こうに行くことはできないらしく、例外もないらしい。

境界線は夜でも虹色に輝いており、その付近では光のおかげで周りも良く見えた。
涼は適当に木を折り、近づける。
すると昼同様、近づけた木は霧散するように消滅した。

それから夜で視界はあまりよくないながらも、森を散策して大体の土地を理解した涼は教会に戻ることにした。

第４話

夜が明け日が昇り始める。
今日も昨日と同じ晴天のようで少しスーツでは暑く感じた。

涼は貧乏ゆすりしている奴隷、木材を振りかぶっている奴隷、投擲する手ごろな石を集めている奴隷達を教会内で観察していた。
どの奴隷も冷静さを欠いており、昨日の一声奮起がやはりただの恐れの裏返しだったのだと理解する。

「眠れたか？…え～と…。そういえば名前聞いていなかったな。」

近づいてきたデュナスが涼に声をかけてくる。
相変わらずデュナスだけは他の奴隷とは違い一人余裕が感じられた。

「トムだ。」

「トムか…。いい名前だ。それで？」

「あまり眠れなかったな。今日の事を考えると恐ろしくなって。」

「そうか…でもそれが普通だ。…しかし俺を信じろ。今日のこの作戦はきっとうまくいく。」

「……ああ。」

涼の返事に満足したのだろう、デュナスは他の奴隷のところにも行き、昨日同様激励の言葉をかける。
涼はそんなデュナスを他所に、教会から出て少し離れた家に入り、ナイフで適当な重さと長さを持つ木材を選び、投擲用として先端を削って尖らせた。

作った投擲具を教会がある最南側の家ではなく、集落の中央からやや南に位置する半壊の家の中に隠しおく。

そしてデュナスの最終説明があるころには教会に戻った。

◆

「それでは昨日も大まかに説明したが、あの時は居なかった奴隷もいるからもう一度最終説明をしておく。まず俺達の場所はここだ。」

デュナスが地面に描いた簡易地図でみんなに説明する。
地図はまるでゴルフのコースのように細長い。
集落は確かに非常に細長いが、集落の北にある森以外は南と東西も荒野で、さらに境界線があり通れないないので、わざわざ地図には描かなかったのだろう。

「まず昨日も言ったが、集落と森以外は隠れることのできる場所は

ない。
そして森からやって来るあいつらはそこにいないと判断したら、間違いなく集落に全員やってくるだろう。
そして、集落に徒に突っ込んでくるのではなく、魔法使い達が家々に隠れている俺達を火球で炙り出そうとしてくるはずだ。そこを利用する。」

昨日の火や煙による相手の視界を遮った際に用意した石や木材で攻撃する説明を再度デュナスがする。

「まずはこの教会側の家に隠れておく。そして相手が集落入り口付近の家を外から魔法で攻撃して、煙が立ち始めたらすぐに前進し、相手が侵入してきたら半壊の家などに隠れながら石を投擲して攻撃し、場合により木材で相手を叩き殺せ。相手は兜と軽鎧を装備しているから、狙うの頭ではなく顔だ。そして殺した槍兵からは確実に武器を奪え。」

奴隷達が真剣な表情で一言一句逃さないように聞き入るのを涼はみやる。

その後、デュナスが言葉を使わない、手を使っての意思疎通のやり取りや、武術の心得があったのだろう、素人の奴隷に槍兵相手を想定した戦い方を軽く教えていた。

そして色々説明が終わったところで、デュナスが質問を促してきた。奴隷達は特に質問もないようだったので、涼はデュナスに話しかける。

「デュナス……まず魔法使い達が来た時は、教会付近の壊れた家々

に隠れる作戦だったが、俺は最初教会に隠れていていいか？
勿論、敵が集落入り口付近の家を魔法で壊し始めて、いざ突撃する時になったらみんなと一緒に突撃する。」

デュナスが涼を無言で見つめる。
しばらくすると特に問題ないと判断したのだろう、了承した。

デュナスの説明が終わり、各々が相手から武器を奪うための武器を持ち出し、シミュレーションしている。
涼は一足先に教会に入ろうとしたが、その前にデュナスに声をかけられた。

「何で教会がいいんだい？」

「……神様に直前までお願いできるからな。」

「はは。随分と心神深いんだな。」

「こういうときだからな。もう入っていていいか？そろそろ来てもおかしくないんだろう？」

「ああ。わかった。」

「敵が来ても確認はいらないぞ。耳はいいから見張りの声で気付ける。その辺は安心してくれ。」

デュナスが頷き離れていく。

本当は教会の状態が他の家よりよく、外から教会の中を見れないかもで心神深くも何ともないのだが、納得してくれたので教会に入る振りをして、この最南の場所から夢中に木刀などを振り回している他の奴隷達、そしてデュナスに見られないよう隠れながら移動する。

移動したのは集落中央南よりの投擲具を隠し置いた半壊家。
そしてそこに集めておいた大量の藁の中に隠れた。
この藁も５０棟の家の中に木材などと一緒にあったものだ。

涼は藁の中に身を隠し、ただ一切の物音を立てることなく敵が来るのを待つ。

心は落ちついていた。このような状況だが動悸はいつもと何も変わらない。
緊張も恐れもなく、ただ時間がくるのを藁の中でまった。

「敵がきたぞおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

そしてその状態から1時間後、ようやく見張りが相手には聞こえない程度に大声を上げながら涼のいた家を通り過ぎ、教会側に向かって走っていった。

そして聞こえる５０メートル程度離れたところでガヤガヤしている様。
しかし１，２分するとそれも静まりあたりから風以外の音が消えた。
涼は軽く人の数倍は優れている気配察知、聴覚、嗅覚を使い相手を探る。
が、まだ付近に敵を感じることはできない。
しかし数分後、人が家の前を通り過ぎるのを感じた。
教会側から集落入り口に向けて…。
（デュナス……）
他の奴隷からは感じられない落ち着いた足音、そして静かな気配。
藁の中で身を潜めているから顔を見ることはできなかったが、今通り過ぎたのが多分デュナスであると判断できた。
そしてデュナスが入り口に向かってさらに十数分後、大量の足音が入り口側から聞こえてきて、既に敵は集落に入っているのを確信する。
どうやら魔法使い達はまだ火球の魔法など使っていないようだった。
兵隊らしく歩調の合う足並みそろえた足音が近づいてくる。
そしてその足音は涼のいる家を少し過ぎたあたりで止まった。

集落は細長いがうねっている為、今の兵達の位置はまだ奴隷達のいる最南側からは確認できないだろう。
涼は静かにナイフを握り締める。

「さて…お前ら。これから訓練を実施する。もう少し前進し、そして魔法使いの方達が炙り出した奴隷達を仕留めるのが今回の訓練の内容だ。
相手は武器らしい武器を持っていない奴隷だが、奴隷であろうとも死ぬ気で攻撃してくる相手には恐怖を覚えるものだ。
今回はその恐怖に打ち勝ち、冷静に二人一組で奴隷を一匹ずつ連携して殺すんだ。言っておくが、こんな所で死んだらとんだ恥晒しだぞ。」

（なるほど…。）

「よし！前進しろ！……それでは魔法使いの皆さん。先制攻撃の方よろしくお願いします。」

涼の耳にデュナスの声が響いた。

第5話

涼はデュナスを最初から疑っていた。

他の奴隷と違ってこのような状況にも関わらず常に落ち着いた雰囲気をかもし出し、そしてあの作戦。

あの作戦はあたかもそれしか術がないかのような、そう思わせるような物言いだった。

森から来ると解っているのなら木々に隠れて待ち伏せする方法が無いわけでもない。

さらに集落は土がそんなに固くも感じなかった。

一日あったら落とし穴を作るなどの戦略が無いわけでもなかっただろう。

それらの方法を完全最初から無いものとし、さらにこの作戦に使ってくださいとばかりに置かれている、アルトの村壊滅から1年前から放置されていたとは思えない、まだ腐ってもいない木材や藁。

そして何よりもデュナスに隙がそんなに無かった事。

殺そうと思えば殺せる場面は何度かあったが、それでも他の奴隷達とは雲泥の差があった。

予想としてはただの向こうのスパイだと思っていたが、どうやらデュナスは今回の作戦の指揮官、上官にあたるらしかった。

「デュナス指揮官。……トムという名の異世界人はどこに隠れている？」

（この声は…。確か。）

ガルンと一緒にいた杖持っていた男を思い出す。
何故かは解らないが直々にガルンの手下が殺しに来たらしい事を確認する。

「ディゼル……。あの異世界人は向こうの教会の中に隠れて―――」

デュナスの言葉を最後まで聞くことなく、ディゼルと呼ばれた男がそこらへんの家に登ったようで、そして意味の解らない呪文を詠唱して、何かを飛ばした。
藁の中に隠れたままなので見れなかったが、今飛んでいったのが多分火球の魔法なのだろうと予測する。何かが風を切って飛んで行くのを感じた。

そしてディゼルと呼ばれた男が魔法を放った瞬間、他の魔法使い達も同様に付近の半壊の家に登り、高い場所から詠唱して同じ物を飛ばし始める。
そして魔法が飛んでいって燃え盛る音が聞こえ始めると、教会側から奴隷達の叫び声が聞こえてきた。

「さてお前ら。練習の成果を見せるときだ。……突撃！」

新兵達が教会側に向かって走っていく。
魔法使いやデュナスもさらに少し前進していくのを耳で確認した涼は、そこで初めて藁の中から顔を少し出した。
作った投擲具を持ち、背中を向けるデュナスと5人の魔法使い達を

見る。
デュナスは先ほどまでのみすぼらしい格好ではなく既に武装していた。
腰には剣も差している。
魔法使い達は全員黒の外套に縁のある尖がった帽子をかぶり、５人とも杖を持っていた。

（……魔法を使うには杖が必要なのか……？）

「デュナスうううううう！てめぇ！裏切りやがったなあああああ！」
廃家から出てきた男がデュナスに叫びながら武器を持って突っ込む。
涙を流しながら憤怒の表情を浮かべるその奴隷の顔には迫力があった。

……だがデュナスの下にたどり着くわけも無く、その前に新兵に体を貫かれる。

デュナスと魔法使いは涼に完全に背中を向けている状態なので顔をうかがい知る事は出来なかったが、涼には多分デュナスが涼しい顔して笑っているように感じられた。

しばらく新兵達による殲滅が続く。
兵も数名ほど死んでいるようだが、それでもやはり２，３名程度のようだった。
対して奴隷はここから見ただけでも軽く１０を越える死体が見える。

まだ１５人程度生き延びて戦っているが時間の問題のように思えた。
そしてもう少し奴隷が少なくなり始めると魔法使いが１人動き出した。
「異世界人が死んだか教会の中を確認してくる。」
「ディゼル……わかった。でも１人ではもしもの事がないとも言えん。できればもう１人誰か着いていってくれないか？」
「……ぼ、僕が行く。」
デュナスの言葉にゆったりとした外套を着ているが後ろからでも少し太り気味とわかる男が答える。
「トオルか……わかった。２人は確認しに行ってくれ。俺達はここから北に誰も通さないよう引き続き見張っておく。」

デュナスの言葉を聞いて魔法使い達の２人が教会に向かって歩いていく。
そして奴隷や新兵を無視して端から教会に向かい、２人が教会の中に入ったところで涼も藁の山から出て動きだした。
後ろに誰もいるわけがないと思い込んでいる隙だらけのデュナスと魔法使いに近づき、その距離が１０メートル弱になったところで、走りながら魔法使いの１人の首に向かって思いっきりナイフで尖らせた棒を投擲した。
そして投げながらも自分はナイフを抜き他の魔法使いのところへ。

投擲した棒が後ろを見せていた魔法使いの首に突き刺さる。
そして涼自身は背後から魔法使いの頭を左手で掴み右手に持ったナイフで喉を切った。

二人が一瞬で襲撃されて、ようやく涼の存在に気付く魔法使いとデュナス。
涼はここにいるもう1人の魔法使いに向けて走り出そうとしたが、その軌道上に瞬時に正気に戻ったデュナスが立ちはだかる。
呆然としていた魔法使いはデュナスが守りに入ってくれたことで正気に戻り、新兵がいる付近まで下がった。

（……もう1人殺しておきたかったが……。）

とりあえず涼は背中を向けて家々に隠れるように逃げながら集落入り口の方に逃げた。
逃げる際、デュナスが新兵に自分が生き残っている事を大声で叫んでいるのが聞こえた。

◆

デュナスside

デュナスは焦っていた。
異世界人が後ろにいたのは、完全に己の落ち度である。
さらに新兵に戦いの最中なのにこちらを向かせるような事をし、その隙を奴隷達に襲われ数名ほど無駄死にさせてしまった。
現在死んだ新兵は６人。

これまでクレイヌでの新兵総死者は１５人程度。
今回のクレイヌだけで過去５回の半数近い死者を出してしまった。

そして何より自分のミスで死んだ２人の魔法使い。
魔法使い達は志願してここにいるから、責任が問われるわけではない。
しかしそれでも死んだ魔法使いを抱えている貴族達に色々言われるのを考えると、気分が沈んでくる。

異世界人を今すぐ追いたくなる気持ちを抑え新兵が奴隷達を殲滅するのを待っていると、それより先に教会に向かった魔法使いの２人が戻ってきた。

「お前のミスだな。デュナス。」

「解ってる。今から取り戻す。」

ディゼルの物言いに少し苛ついたがそれでも表には出さないで、デュナスはこれからの作戦を考える。

（異世界人は多分森に逃げたのだろう。１人で戦うにはあそこに行くしかない。）

木々の多さから隠れながら戦うには今回の場所で一番最適とも言えた。
そしてしばらくすると、新兵達が異世界人を除く奴隷の殲滅を完了して戻ってきた。

結局死んだ新兵は８人まで増えた。

今いる兵は２２人、そして魔法使い３人。
負けるわけは無いが自身の経歴にこれ以上傷をつけないためにも、もう１人たりとも殺させるわけにはいかなかった。

（しかしこうなった以上虱潰しに探していくしかないか……。）

異世界人のあの動きを思い出し、部隊を分けるのに少し不安も過ぎったが、それでも結果魔法使い１人に７人の新兵をつけて３つの部隊に分け、異世界人を探す事にした。

第6話

涼は家々に隠れるように移動しながらデュナスから逃げたが追ってこないと解ると、すぐに逃げるのをやめ、石積みの家の上り遠くからデュナスとその兵、そして魔法使い達を見ていた。

デュナスは新兵が奴隷達を殺し終えるまで涼を捜索する気がないらしく、奴隷達が全滅するのを見届けている。
兵の訓練で指揮官自ら手を下さしたら駄目な決まりにでもなっているようだった。

敵の状況を確認した涼は家から降り、適当な長さの棒を2本拾い十字を作りそれを藁で結んで固定する。
そして作った十字に上の脱いだスーツを着せ、スーツの中にも藁を沢山敷き詰め、人間らしくして、それをなるべく高い家の上に、下からでは決して見えないようにおく。

まるで潜んでいるかのように。

さらに集落入り口の半壊家から木材を10本程度持ってきて、その木材に隠し持っていた仕事用の極細糸、ワイヤーで結びそれを自分のダミーを置いた家とは2軒ほど離れた入り口付近の家の中に掛け置く。

そして涼はそれらの家とは中央通路を挟んで反対側の家の物陰に隠れ、敵が来るのを耳を澄まして待った。

しばらく音を立てず耳を済ましていると、足跡が聞こえてきた。
足音はなるべく殺しているようだったが、それでも涼の耳にはしっかりと聞こえ、最初涼が藁の中に潜んでいた時のように足並みそろえたようなものではなくばらばらだった。

（中央通路、左端、右端に分かれて進みながら捜索している……
後ろに逃さないようにするためか…。）

ある程度近寄ってきた兵達を積み上げられた家の岩の隙間からから覗くと、涼の判断通り1人の魔法使いに7名程度の槍兵が付くように中央通路、左端、右端の3箇所から敵が捜索をしていた。

このままでは確実に見つかるが、それでも涼は動かずただ敵が気付くのをじっと待つ。

暫くすると左端にいて家に上って周りを確認した兵が無言で中央の隊、ディゼルを手招きした。
そして中央、左端から集まる魔法使いと兵士達。

デュナスが涼のダミーが置かれた家を見て、指で魔法使い達に合図を送る。
そして合図を受けて頷いた3人の魔法使いはそこら辺の家に登り、詠唱して3人、3つの火球を放った。

涼はここで初めて魔法、火球を目撃した。

杖の先端から火の球が出現する。
２つの火球は半径５０メートル近くあり、小太りの男に至っては半径１メートル程の大きな火の球が杖の先に出現していた。
質量すらありそうな炎でできた球が時速１００キロ程の速度で、涼のダミーを置いた方向に向かって飛んでいく。
そしてこちらからではダミーが見えないから解らないが、火球はダミーに直撃したようだった。

「向かえ！」

デュナスが新兵に命令をしたのを聞いて涼は持っていた糸を思いっきり引いた。

カランカラン！

響く大量の木材が倒れる音。
それを聞いたデュナスがいち早く反応する。

「まだ奴は生きているぞ！逃がすな追え！」

そこからは涼のいる家なんて確認もしないで魔法使い達や兵士はがむしゃらに音のした向こう側を追いかけるように走っていった。
デュナスも早歩きで涼のいた付近を通りすぎたのを確認して初めて、涼は家を出て隠れながら教会に向かった。

教会では焼き焦げた奴隷や槍により突かれて絶命した奴隷たちが転がっていた。
数えるのは面倒だからしなかったが多分３９人なのだろう。
涼は人の焼けた臭いを嗅ぎながらも奴隷たちを無視し、死んでいる槍兵の槍を見る。

槍は柄が木製で先端に３０センチ程度の鉄の刃をくっつけた感じの槍だった。
涼は槍を叩き折りナイフを使って柄に埋め込まれた刃を取り出す。

そして今は森を索敵しているであろう敵が再度ここに戻ってきた時のために罠をはった。

◆

約1時間後、ようやく森から敵が戻ってきた。
しかし来たのは、魔法使い1人と7人の新兵達だけ。分かれて探す

事にしたようだと判断する。
人数を確認した涼は教会付近まで下がって相手が来るのを待つ。
そして敵８人が索敵しながらようやく教会を視認できる位置まで来た時に、わざと通路を横切るように家から出た。

「い、いたぞおおおお！」

涼を見つけた新兵の１人が声をあげ、全員がこちらを見る。
そして新兵達は魔法使いを無視して涼に向かって走ってきた。
本来なら距離がある内は魔法使いに遠距離攻撃をさせるほうが得策たが、デュナスのいない新兵達ではそこまで頭は回らなかったらしい。
魔法使いも火球の軌道上に兵士たちが重なるため、詠唱することができないようだった。

ある程度距離が縮まってきた時、涼も兵に向かって走る。
７人の新兵が涼に向かって走りながら槍を構える。
しかしもう少しで交わろうとしたところで７人の兵士のうち先を走っていた兵士４人が突然首を刈られ、後頭部から地面に激突した。

それは涼が通路を挟んだ家同士で結んだワイヤー。
目を凝らせば見ることができるが、涼に意識を全て傾けた新兵が気付けるわけが無かった。

涼は倒れて脳震盪をおこしている４人に目を向けることもなく、驚いて止まってしまった兵士に接近し首をナイフ裂き、持っている槍の刃をもう一人の兵士に投げた。

そして突き刺さるのを確認しないまま最後の兵に突っ込む。

そこでようやく最後の新兵と魔法使いが正気に戻り、新兵は涼に向かって槍を突き、魔法使いは詠唱をし始めた。

涼は槍使いの腰の引けた突きを回避しナイフで喉を切り裂き、そのまま魔法使いに背を向けて走り、家の壁に隠れた。

遅れて来た、火球をが石積みの壁により防がれたのを確認すると、再度通路にでて魔法使いが２度目の詠唱を終える前に顔に向けて拳による当身を放った。

涼の拳を顎に受けて、昏倒する魔法使いの杖を奪い離れに放る。

そこまでして初めて、涼は最初の糸に引っかかって脳震盪を起こしている４人近づき、その喉をナイフで切って絶命させた。

◆

「おい、起きろ。」

殺した新兵の死体を教会の側に移動させた涼は未だ気絶している、魔法使いを叩いて起こす。
とんがり帽子を取って素顔を確認したがデュナスや他の新兵達同様、西洋風の顔つきだった。

「う…ん…。」

魔法使いが起きて、涼の顔を見る。
驚愕の表情を一瞬した後、叫ぼうとしたので、左手で口を塞ぎ右手で喉下にナイフを突きつける。

「騒いだら殺す。抵抗しても殺す。だが俺のいう事に静かに答えることができたら命はとらない……俺の言っていること解るか？」

相手が何度も頷くのを確認した涼は左手を離し、ナイフもさげる。

「他の連中はまだ森で捜索か？」

「は、はい。」

「いつごろここに戻ってくる？」

「わ、わかりません。もう少し探してからアルトの村を再度捜索するとしか…。」

「……魔法使いは杖無しで魔法を使う事はできるか？」

「……い、いえ、専用の杖がないと魔法を唱える事はできません。」

「そうか……では、この境界線を越えるにはどうしたらいい？」

涼の言葉に魔法使いが固まる。
当然だろう。これに答えるという事は涼が逃げる事ができるという事なのだから。
そして涼は相手が目を反らした瞬間に、涼でもこの境界線を抜け出せることができる術がある事を確信した。

「早く言え。死にたいのか？」

ナイフを再度突きつける。

「クレイヌで奴隷を逃がしたなんて知られたら、どっちみち殺されちまう。」

「今殺されるよりは――――！！！」

また遠くから敵が近づいてきたと判断した涼はすぐに魔法使いの首をナイフで切り裂き絶命させる。
そして魔法使いを先ほどの新兵と同じところに持っていき、涼もなるべく教会から離れた家に隠れた。

遠くからやってくるのはデュナスと太った魔法使いに新兵８人。
彼らも先ほどの魔法使い達同様、一軒一軒半壊の家を確認しながら向かって来ていた。

しかし、近づいてきて教会の側のに新兵と魔法使い死体が置かれているのを見ると、デュナスまでも我を失うような形で捜索を止め、兵士や太っている魔法使い達と一緒に、涼のいる家を通り過ぎ死体に向けて走っていった。

涼はわざと槍を7人の新兵の心臓部に突き刺して、そして見えやすい位置に並べておいたが、それでも学習しないデュナスを半壊の家から静かに馬鹿にしながら見つめていた。

第7話

デュナスｓｉｄｅ

「う、うわあああああああああああ。」

デュナスの傍にいた新兵が叫び声をあげる。
デュナスも死体を見て戦慄を覚えていた。

森を捜索しても一向に見つからないから、先に魔法使いのカルマと新兵7人を再度集落に向かわせたらこの状態だ。
兵も魔法使いのカルマもほとんど首を裂かれ死んでおり、兵達に至っては綺麗に死体を並べられ、心臓部に彼らの持っていた槍が突き刺さっていた。
自然と足が震えだすが部下の手前、無理やり止めようと手を後ろに回して腿をつねる。

（俺たちが戦っている相手は本当に資質無しの人間だったのか…？）

残忍な行為もそうだが、魔法使いもいたのにたった1人で8人を殺したという行為に恐怖を覚える。

デュナスは軽く付近を見渡し、異世界人がいないのを確認すると、あまりの惨状に吐いている兵士達を一先ず教会内で落ち着かせることにした。

「お前ら落ち着け。……少し教会で休みを取る。教会も既に半壊状態で異世界人の隠れる場所はない。」

デュナスが誘導すると、兵達7人も震えながらも付いてくる。そして7人をそこら辺に座らせて落ち着かせ、これからの事を考える。

（どうするべきか…。ディゼル達をこちら来させ、このまま1日ここで待つほうが得策だろうか……。）

奴隷たちが兵や魔法使いを皆殺しにすれば自由を獲得できると、クレイヌ開始前に奴隷達に宣言しているが、それは嘘である。国は奴隷たちに市民権を与える気などさらさら無く、1日経つと何か異変があったのかと確認のため、さらに兵がやってくる。

異世界人を確実に殺すなら、1日待つべきだった。

（しかしそれでは俺の立場が……。）

今までクレイヌでここまで大量の兵が死んだことはない。
今回既に魔法使いを合わせると１８人も死亡者を出している。さらにこのまま何もできませんでしたで助力を要請するような形を取れば、デュナスは間違いなく今の地位から格下げになるだろう。

（駄目だ！やはり俺たちだけであれを殺すべきだ。）

デュナスは改めて決意を固める。
今までは兵の訓練の一環だから手を直接出す事はしなかったが、ここまで来たら話は別と、次に異世界人を見つけた自分の手で殺す事を決意した。

決意を固めたデュナスは教会内で未だ震える新兵たちから離れ、魔法使い残り２人のうちの１人であるトオルの場所に向かった。

トオルは教会付近の家の壁にもたれ掛かっており、そちらも新兵同様震えていた。

◆

涼ｓｉｄｅ

涼は家の物陰から、他の西洋風の顔の群れとは一人だけ違った太っているアジア人風の男に注目していた。
杖をもって黒の外套を着ていることから、その男も魔法使いと判断できた。

「どうしたトオル？びびっているのか？」

デュナスが涼が見つめていた魔法使いに声をかける。

（トオル……か。）

「五月蝿い！大丈夫だ。あと1人なんだ。あと1人…。」

「まぁな……だが奴はお前と同じ異世界人だ。変な気を起こしたりして結託とかするなよ？その時はお前も殺すことになる。」

「わかっている！僕はここで……この世界で成しあがる！」

「その言葉を聞いて安心した。じゃあ俺は新兵達のところに戻るとしよう。あいつらもお前同様、こんな事になるとは思っていなかったんだろう、がたがた震えている。
あと、異世界人がどこにいるかわからない以上、お前も遠くに行かないほうが身の為だぞ。」

デュナスが少しトオルを馬鹿にし、睨まれながら教会のほうに歩い

ていく。
デュナスが教会に入るのを無言で睨んでいたトオルが、苛立ちのあまり家の壁を蹴る。

「糞！何で僕がこんな目に遭わないといけないんだ！頭の悪い糞奴隷達を遠くから魔法で殺すだけだったはずなのに……。」

一人癇癪を起こしているトオルを見つつ、涼は周りを警戒する。
トオル以外は周りに誰も居ない。
デュナスも当分教会から出てこないと判断した涼は、教会から見られないようトオルに近づく。

音もなく接近する涼にトオルが気づくわけも無く、涼の接近に気づいた頃には既に涼は後ろから糸を首に回していた。
そしてトオルが声を出せないよう少しきつく絞める。

「騒ぐな。抵抗しようとすれば殺す。叫ぼうとしても殺す。……解ったら、杖を捨てて俺の体を数回軽く叩け。」

先ほどの殺した魔法使いへの言葉と大体同じような事を吐き相手の反応を待つ。
言葉を理解したトオルはすぐに杖を捨てて、涼の体をパンパンと3回ほどタップするように叩いた。
それを確認した涼は糸を戻し、杖を片手で片手で拾い、そしてトオ

ルにナイフを突きつける。

「ゴホッ！ゴホッ！…お、まえは。」

「お前と多分同郷の人間だ。涼という。その顔つきで名前がトオル……お前も日本人なんだろう？」

「お、俺は……トムと聞いていたから、てっきり…。」

「とりあえず、向こうの家まで端から移動しろ」

ナイフを後ろから突きつけつつトオルに先頭を歩かせ、教会から少し離れた家の中に入る。

「お、俺を殺すのか？」

声を震わせながらトオルが涼に言う。

「まさか…同じ日本人を殺すわけないだろう。」

「ほ、本当か？」

「ああ。今までずっと一人で戦っていたが、ようやく共に戦える奴を見つける事ができたんだ。……なぁ、トオル。お前日本に帰

りたくないか？」

「日本に帰る事ができるのか！？」

トオルが大声で叫ぶ。涼は入り口から教会を確認する。
教会からデュナスや兵は出てこない。

「おい…。」

「す、すまん。し、しかし本当に日本に帰る事ができるのか？」

「ああ可能だ。俺は確かに魔力資質がなかったが、それだけで異世界人をここに送ると思うか？魔力が無くても、ここにはない技術を提供できるかもしれないだろう？それなのに、奴らは俺をクレイヌに強制参加させた……何故だと思う？」

「……！！！……元の世界に戻る方法を…知ったからか？」

「その通りだ。俺は偶然その方法を知った。だから口封じのためここに送られたんだ。」

「どうやって！？どうやって元の世界に戻ることができるんだ？」

トオルが涼の両肩に手を置き揺さぶる。

「今はいう事はできない……それに今言っても意味がない。まずはこの境界線の向こうに行きガルン……俺を呼び出した奴なんだが、あいつの家に行かなければならない……。トオル、お前この境界線

を越える方法を知らないか？」

涼の言葉にトオルがビクッと一瞬震える。
そして目を離した事から、涼はトオルもあの魔法使い同様その術を知っていることを確信した。

「トオル……帰るにはここを越えなければならない。俺をここに飛ばした貴族の家と境界線を越える方法を教えてくれ。……そして二人でこんな危険な世界からおさらばしよう。」

「涼…。」

涼の言葉にトオルがこちらを見上げる。

「お、お前は俺を責めないのか？……俺は奴隷達を殺しまくった。お前の事だってさっきまで殺すつもりだった。」

「殺すしか生きる道がなかったのだろう？ここはそういう世界だ。ならば殺してでも自分が生き残る道をいくしかないだろう。お前は割り切る事ができたんだ。それだけで十分立派だ。あとはこの世界から離脱して元の世界に戻り平和に暮らそう。……お前はこれまで良く頑張った。」

◆

トオルｓｉｄｅ

トオルはまだ自分が普通の人間として生きていけるといわれたような気がして、涼の言葉が嬉しかった。

涼以外に誰が地球から召喚されたか知らないが、トオルを召喚した貴族の女はトオルの太った容姿と顔を見ただけで嫌悪感を表し、召喚されてからこの数ヶ月まるで奴隷のような扱いをされた。

召喚主に魔法を使う事ができない魔法具を首にはめられ、そして魔法を強制的に覚えさせられた。怠けていると判断されると女に仕えていて、トオルに魔法を教えていた魔法使いが皮膚を焦がす程度の魔法でトオルを何度も焼いた。

トオルは痛みに耐えながらも生き延びるため、魔法の訓練を耐え切った。

そして一通り魔法を覚えて、これで訓練終了だろうかと思った矢先のクレイヌの参加。

貴族の女は最初からトオルを他の貴族、もしくは国に売り飛ばす事しか考えていなかった。

トオルのクレイヌの参加はこれで2回目である。

前回のクレイヌでは、魔法使いなのにも関わらず1人しか奴隷を殺す事ができなく、結果言い値での買い手も付かず、終了後召喚主から鞭で何度も叩かれた。

あれから1月後の今回のクレイヌ。
トオルはあの女から離れるため、そしてこの世界で生きていくために奴隷達に一切の同情をする事無く、殺す事を決めていた。
異世界人がいると聞いていたがそれでも関係なく、殺そうと決めていた。

そしてその決意が鈍ることなく、トオルは既に6人の奴隷を殺していた。
奴隷４０人のうちの6人を殺したのだ。きっと買い手がつき、あの女の下から離れられる。
そんな事を考えていた矢先、

何事もなく終わると思っていたクレイヌで起こった同じ異世界人による殺戮劇。

何だかんだで初めてこの世界で明確に自分の死を意識させられて恐怖で震えた。

しかし実際会った涼は最初は怖かったがトオルが日本人だと解ると優しくなり、そして今までのトオルの行為も認めてくれた。

トオルはこの国に来てから酷い目にしか遭っていない。
魔法を使うことができても、自分に酔うなんて事できなかったしする暇もなかった。

ただ日々生き残るために必死だった。

だから元の世界に戻れるという涼の言葉を聞いた後、境界線を越える方法を聞かれて断る事などできるはずがなかった。

喋ったとばれたら勿論トオルは殺されるだろう。
しかし、それでも一縷の望みを持って涼にしゃべる事にした。

「これだ…。」

涼の質問にトオルは石を出す。
緑色の石。大きさと形は地球で使っていた固形石鹸と同じくらい。
しかしこれはただの石ではなく、境界線の影響を受けなくなる石。
この石から半径１０メートルは境界線の影響をうけなくなる特別な石だった。

今回トオル達は魔法で転移して来たわけではなく、魔法使い５人がこれを持って、兵士達と森を歩き境界線を越えてきていた。

涼に石とそれらの事を話す。
森を抜けた向こうにはイルの都市部がある事も包み隠さず話した。

「ガルンという貴族はしっているか？」

「いや…わからない。……でも貴族なら都心部の平民でも知っているんじゃないかな？」

「……そうか……ではさっさと境界線を越えよう。杖を取るんだ。」

涼が入り口から外を確認しつつ、家の片隅に放られていた杖を指差す。

トオルは杖を取りに移動し、涼に背中を向ける杖を取る。

しかしその瞬間、

首、喉に熱を感じた。

「はっ…はひ…？」

声を出す事ができない、まるで声が口から出る前に喉から漏れ出ているかのよう…。

体に力が抜けるのを感じ、倒れながら喉を触る。

そして喉がざっくり切り裂かれているの理解した。

「すまないな。お前が生き残るために奴隷を沢山殺したように、俺が生き残るためにも以降のお前の存在は邪魔にしかならない。」

意識が失われる前に涼の言葉が響き、

――――――そしてトオルは目を閉じた。

第7話（後書き）

不快になった人がいましたら全力で謝ります

すいませんでした＞＜

第8話

ディゼルｓｉｄｅ

ディゼルと傍にいる新兵達は無言で森で索敵する。
ディゼルはいつでも詠唱できるよう集中を切らさない。

魔法使いという存在は一般人、そして兵からも恐れられる存在である。
火球やつらら、雷だって放つことができる存在でさらには障壁魔法を使えば、攻撃を剣撃や弓などを完全に防御する事ができる。
戦闘に特化した存在、ただの兵士では届かない頂にいるのが魔法使いなのだ。

（だが……あの異世界人にはおそらくもうばれている。）

確かに魔法使いは人を殺す術を沢山持っているが、魔法使いは武芸者でも何でもない。
戦慣れをしている歴戦の者から見れば隙だらけの存在でもあるのだ。
魔力を多く使う障壁魔法なんて常に展開するなんて事できるわけが

ない。
中には魔法と剣を極めた存在もイル国にはいるが、少なくとも今回クレイヌに参加した魔法使い5人は全員中級までの魔法しか習得していなかった。

それが故にあっさりと隙を突かれて2人は絶命した。

一言で言うと素人なのだ。

今回クレイヌに参加している魔法使いは攻撃力こそ高いが全員戦慣れしていないただの新兵と同じ存在だった。

ガサッ！

草木の音に思わず振り向き杖を向ける。
杖を向けた先には一緒に索敵していた新兵が、槍で草木を掻き分けていただけだった。
杖を突きつけられ、新兵が震えながら槍を捨て両手を挙げる。
ディゼルは無言で杖をさげ、捜索を再開する。

（最初からあいつが不気味だった。）

トムと名乗っていた異世界人を思い出す。
細身で黒服を身に纏い、背も高く美丈夫だが異世界から突然飛ばされたのにも関わらず、表情に一切の変化すらこちらに見せない気持ち悪い男。
その表情からは何を考えているか一切わからなく、目が合うと全てを見透かされる気すら感じた。

（トオルも殺したがっていたようだが、何としても俺が殺さなければ…。）

ディゼルは主であるガルンが嫌いだった。
何の魅力もないクズで己1人では何もできないくせに常に上から目線。
ガルンから離れたいと常々思っていた。そんな時にクレイヌでの強制参加。
ガルンの意図がよめたディゼルは少なからず歓喜した。

だからクレイヌへの参加命令を了解し、自分という存在を売るためガルンの要望通り、異世界人を自分が殺そうと我先に隠れていると思われた教会に向かい魔法をぶつけた。
そんな簡単に終わる仕事のはずだった。

しかし今現在傍にいる兵の一々の言動にすら敏感に反応してしまうほど精神的に追い込まれている。

（クソッ！何でこんな事に！）

ディゼルは震えながら今の自分の状況に内心怒りの言葉を吐いた。

「魔法使い様あああ！」

そんな時、集落の方向から軽鎧と兜だけでなく顔も血まみれで顔すら判別できない新兵が走ってやってきた。

走ってきた槍兵はディゼルの下まで駆けつけると両手両膝を付き、下を向き肩で息をする。

「おい！何があった！？」

「きょ、教会…で、ハァハァ…襲撃。現在デュナス指揮官達が…交戦中です。」

「クソッ！やはり森にはいなかったか！行くぞお前たち！」

ディゼルは傍に居た7人の新兵に声を掛けて教会に向けて走り出す。

血まみれの兵士を待っている余裕などない。

自分が異世界人を殺さないと今回クレイヌに出た意味などないのだ。

ディゼルは血まみれの兵士だけでなく、傍にいた7人の兵士でも追いつけないほど全力で走り出す。

森を抜け集落に入る。
そこで初めてディゼルは新兵が付いてきているか一度後方を確認する。

しかし、後方を確認した途端顔に衝撃を受けた。

「ガッ！」

殴られたと理解し、そのまま衝撃で飛ばされる。
倒れた状態で見上げると、先ほどの血まみれの新兵がディゼルを見下ろしていた。

新兵が兜を外し黒髪が現れ、そこでようやく事態が飲み込めた。

「お…まえ……新兵達はどうした？」

「バラバラに走るから一番後ろの奴が殺されていっても誰も気付かなかったよ。」

「クッ…ソ…。」

「お前に聞きたいことがある。ガルンについて話せ。」

異世界人がディゼルに無表情で問いながら傍にあった杖を取って遠くに投げる。
魔法使いが杖が無ければ魔法を唱える事ができないのは既に知っているらしかった。

「そんな事聞いて――！！！！ぎゃあああああ。」

言葉を最後まで言う前に異世界人がディゼルの右手小指を持っていたナイフで切り落とした。

「ガルンについて話せといった。」

「ぐうううううぅう。」

「もう一本切り落とすか…。」

「ま、、待ってくれ…は、話す。話すから。」

痛みを絶えながらディゼルが答えると、異世界人はナイフを突きつけたまま促す。

「わ、我侭で自己本位な没落寸前の貴族だ。こ、今回…お前を召喚したのは、資質を持っていたら…大金で売ろうとしていたからだ。」

「そうか……ガルンは魔法を使えるか？…それとあいつに仕えている魔法使いは何名だ？」

「い、いやガルンは魔法は使えない。そしてガルンに使えている魔法使いは、俺とグラハの2人だけだ。」

「……あの森を抜ければイルの国に繋がっているのは本当か？」

どうやら自分だけでなくほかの連中も拷問されたらしく、異世界人はイル国の場所を知っているようだった。

「あ、ああ。しかし、お、俺がいないと境界線を抜けることはできない。だから殺さないでくれ。」

これは本当の事。

ディゼル、もしくは他の魔法使いがいないと……レジスト石を持っていないとここを抜けることなんてできない。

このままだと殺されると判断したディゼルは何とか生き延びるため、取引を持ちかけようとした。
最悪この国を抜けなければならないが、それでも死ぬよりはましである。

しかしその前に、目の前の異世界人が無言で軽鎧の中から緑色のレジスト石を取り出してディゼルに見せた。

「な、何でお前が……これを…？」

「ありがとう。お前の反応で確信が持てた。」

そして異世界人はナイフをディゼルに向かって無表情のまま振りかぶってきた。

◆
◆

ガルンｓｉｄｅ

「な、何という事だ……。」

夜、お抱えの魔法使いであるグラハから伝えられるクレイヌでの出来事。
ディゼルを含む魔法使いの５人は全員異世界人に惨殺され、そして生き残りは兵士たった８人とその指揮官だけ。
そして異世界人のレジスト石を奪っての廃村アルトからの逃走。

「さ、下がってよい。」

グラハが部屋を出る。

（お…終わりだ…もう。）

国も他の魔法使いを抱えていた貴族達もガルンを責めるだろう。
異世界人がたった一人であんなに殺したのだ。

ただの異世界人ではなかった。
もしかしたらディゼルの判定ミスで本当は魔力資質が高かったのか

もしれない。

近々呼び出し状が来ることを自覚しながら、ガルンは嫌でも自身の終わりを想像してしまうのを紛らわすため酒を飲む。

コンコン……

しばらく酒を飲んでいると、部屋がノックされた。

「ガ、ガルン様。グ、グラハです。少々よろしいでしょうか？」

「……後にしろ。」

入室を拒否する。

しかし、ドアは勝手に開き、そしてそのまま入り口付近でグラハが倒れた。

首から血飛沫をあげながら…。

「こんばんわ。」

そして後ろから滴る血が着いたナイフを持って異世界人が入ってきた。
服装は魔法使いの着ている外套ととんがり帽子……死んだディゼルのものだった。

「な、何で…お前が…。」

「聞き出すのは誰でも良かったが、それでもお前には用があった。」
異世界人がゆっくりと近寄ってくる。
思わずガルンは震える体で後ろに後ずさりした。

「聞きたい事があるのだが、俺を元の世界に戻す方法はあるか？」

「もも、もちろんだ。呼ぶ方法もあれば帰す方法もある。」

「本当か？」

異世界人がガルンの目を見てくる。
それはまるで全てを見通すかのような漆黒の瞳。

「ほ、本当だ。」

「なるほど、ない……もしくは知らないか。」

「い、いや「もういい。この質問は終わりだ。」…。は？」

何故かは解らないが一瞬で嘘を見抜かれた。

「デュナス・エイカーという男はどこで寝泊りしている？」

デュナス・エイカー。今回のクレイヌの新兵の指揮官。

「や、奴なら兵舎にいるはずだ。」

場所を要求されたので地図を渡す。

地図を一通り見た後、異世界人がガルンを見て、ナイフの握りを変えゆっくりと近づいてきた。

「ま、待て！殺さないでくれ。か、金ならやるから。」

「没落寸前とディゼルから聞いたが。」

「す、少しなら隣の寝室にまだある。」

「そうか。有効に使おう。」

「お、お願いだ。助けてくれ。」

そこで異世界人が初めて少し笑みを見せた。
笑っているだけのはずなのに……端整な顔立ちのはずなのに……

その顔は化け物に見えた。

「お、お願いだから……。だ、誰かあああああああ！！！！！」

恐怖と回ってきた酒で立つこともできず、後ずさりながら叫ぶ。
その様子を異世界人が不気味な笑みを見せながらゆっくりとまた一歩近づいてきた。

◆◆

涼side

寝室に移動した涼はそこら辺にあった布でナイフの血を拭く。
そして引き出しから如何程の価値があるかはわからない幾ばくかの金を取り、ポケットに入れる。

（当分は向こうに戻ることができないか……いや、もしかしたら一生か。）

ため息を一つ漏らした涼は金を盗ってすぐにガルンの邸宅を入ってきた一室の窓から出る。
そしてこの世界で現在唯一自分の顔を知っているデュナスのいる兵舎に向かった。

第8話（後書き）

第1章終了です。

2章は全部書き終わってから1章のように毎日更新する形を取りますので、そこそこあくとおもいます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8493u/

異世界でもする事があまり変わらなかった人のお話。

2011年7月20日22時02分発行